

FIT-SDGsプロジェクト Aチーム

電気工学科	3年	酒井良輔
社会環境学科	2年	中田夏海
情報システム工学科	1年	赤穂祐斗
情報システム工学科	1年	清田蒼麻

■ 目次

- テーマ・選択した課題
- 防災教育の在り方
- 課題解決の方法とそれがもたらす影響
- SDGsの17の目標との関連
- 防災教育に関する取り組み
- グループワークを通して学んだこと、新たな発見

テーマ・選択した課題

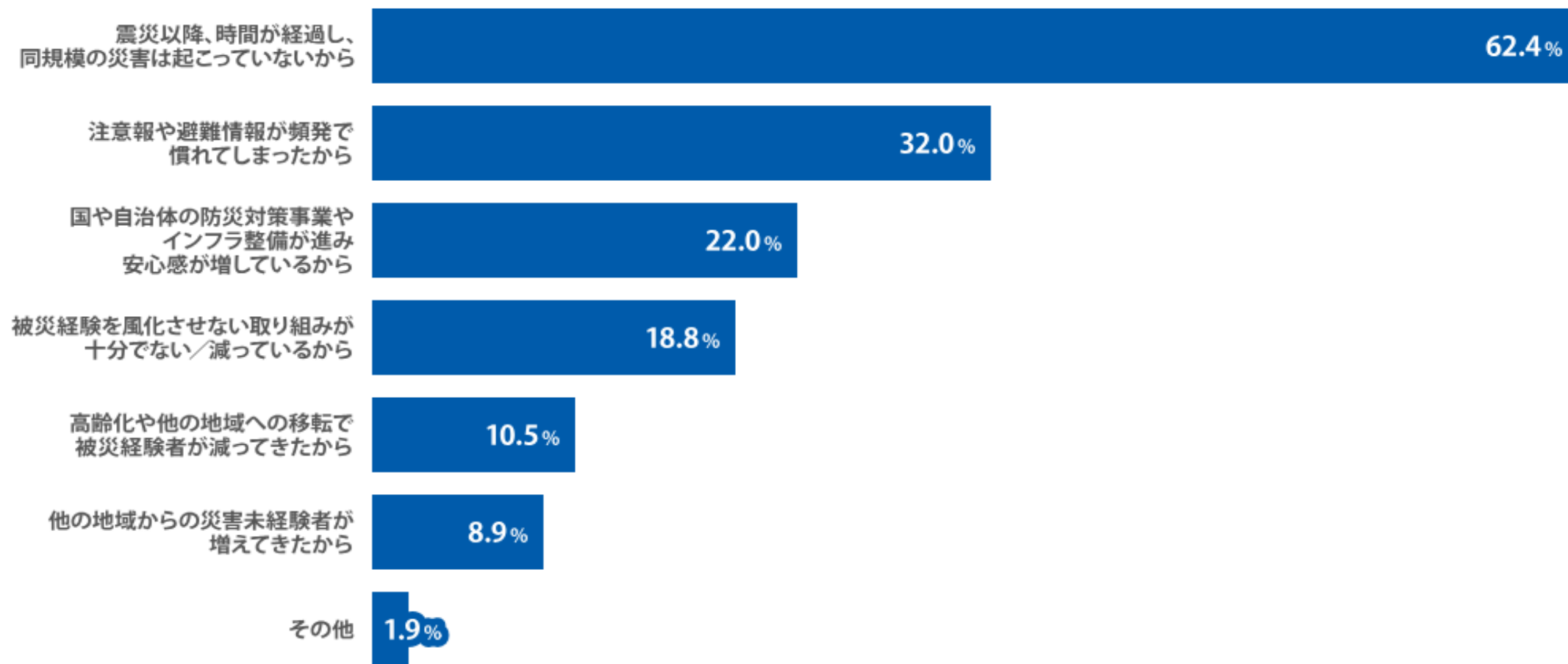
防災意識の
低下

防災教育の
質を高める

防災意識が低下している理由

東日本大震災から12年 被災地での防災意識調査

複数回答／n=1,162（防災意識は「薄れている」「どちらかというと薄れている」と回答した方）



防災教育を行うにあたっての問題点

- 時間数が少ない
- 予算が足りない
- 防災訓練のマンネリ化
- 防災意識の低下
- 訓練実施にコストがかかる
- 当日運営人員の確保が必要
- 防災訓練実施のための準備や後片付けが必要

防災教育の在り方

文科省の定める防災教育

- 防災教育の意義：命を守るための行動を学ぶこと
 - 目標：防災力を持った市民のリーダーの育成
 - 目的：知識＋実践力を身に付けること
- ⇒ 人間力・生活力・市民力を育む

防災教育の在り方

防災・減災訓練の構造

①まなぶ（学習）

防災・減災に必要な情報、知識、技能を習得する.

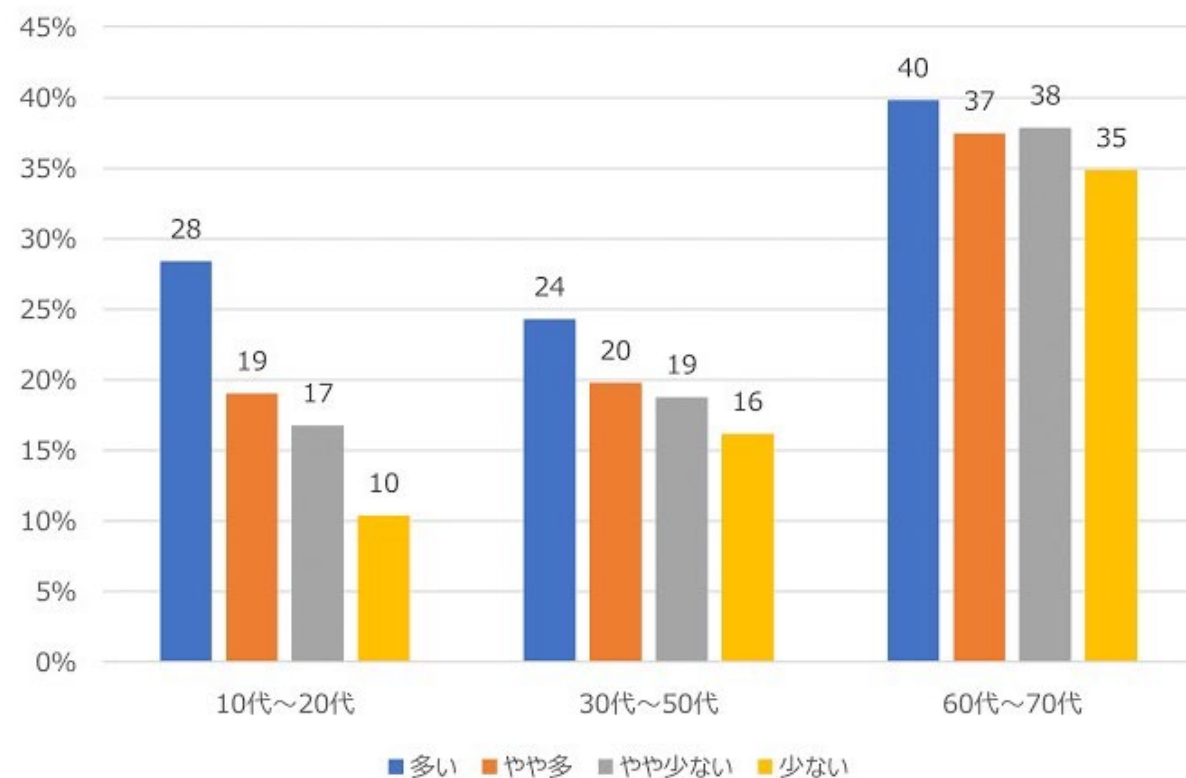
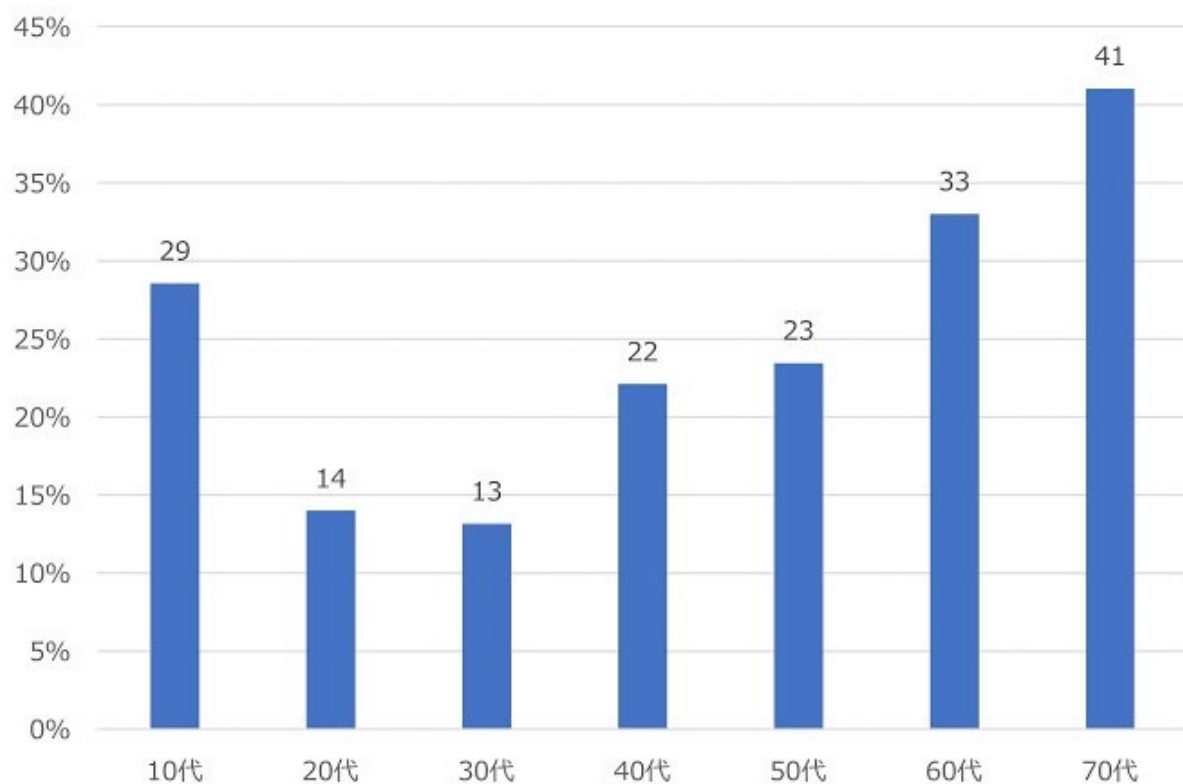
②ならう（練習）

理解を深めるために問題について考える.

③ためす（演習）

知識と行動がつながっていることを確かめる.

若年層の防災訓練の参加率が低い



若年層の参加率を上げるには

- コミュニティ参加の促進
- ゲーミフィケーションの導入
- SNSと宣伝
- 体験型イベントの開催
- 報酬やインセンティブの提供
- 防災教育をオンラインまたはオンデマンド化する
- VR/AR・デジタルツイン・GISなどの最新技術を活用した防災イベント



<https://www.grundtvig.co.jp/240215-2/>

<https://www.jihoken.jp/mado/cat2/256/>

静岡県の防災教育の取り組み

到達目標

静岡県を含む広い地域で危惧される南海トラフ地震をはじめとする自然災害に対する科学的な知識を有し、それに基づいて災害時に自己や他者の生命と災害後の生活を守る上で有用な最低限の防災知識・スキルを獲得すること。

静岡大学防災マイスター称号制度

一定レベルの防災知識を備えた学生を養成して社会に送り出すことを目的としている。

全国で「防災マイスター称号制度」を行うことで
防災意識が上げることができる！！



防災教育の質を高めるには

- イベントを体験的な内容にする
- 様々な種類の災害への対応
- 避難訓練、消火訓練、通報・伝達訓練、応急救護訓練など
- 炊き出し訓練、住民協力要請の訓練、実際に避難所を利用した訓練

4 質の高い教育を
みんなに



9 産業と技術革新の
基盤をつくろう



SDGsの17の目標との関連

実際に行われている防災教育 (小・中学校)



「緊急地震速報を活用」



「火山噴火を想定」



小・中学校合同避難訓練(地震・津波想定)

自分の学科の学びをどう活かせるか

- 情報システム工学科

- ⇒ 防災教育にIT技術（VR/AR）を活用して、経費を削減させる
- ⇒ 災害の情報を効率良く一元管理できるようにする
- ⇒ 情報の記録、処理、伝達などを行い防災を強化する

- 電気工学科

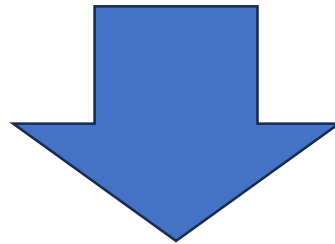
- ⇒ 電気配線の確認、過負荷や短絡のリスク管理を行い火災や感電事故を防ぐ
- ⇒ 災害時の電力供給の回復、電気設備の点検・修理・復旧作業を行う

- 社会環境学科

- ⇒ デジタルツイン・GISなどの技術を活用し、よりリアルな災害シミュレーションを可能にする
- ⇒ 社会統計学などの統計手法を用いて、防災意識の実態把握と他要因との相関関係の把握に努める

グループワークを通して学んだこと、 新たな発見など

- 若年層の防災活動への参加率、防災意識の低さ。
- 小・中学校では毎年防災訓練が行われていたが、高校以降頻度が一気に減った。（家にいる時や、出先で1人の時の防災について、考える機会が少ない）



体験型イベント、ゲーム感覚の導入、オンライン・VR技術の導入など
新しい形の防災教育

若者の防災意識の向上を図るためには、今の時代に最適化された
『次世代型防災訓練』の確立が不可欠！

日本の災害対策の脆弱性と改善方法

Bグループ

情報システム工学科1年
社会環境学科2年
情報システム工学科3年
電気工学科3年

水谷
川岡
磯本
田中

選択したテーマ

「日本の災害対策の脆弱性を改善するには？」

災害における脆弱性

→起きるうる災害の被害の受けやすさや対応力のこと

私たちが注目した脆弱性

→**高齢者や障がい者、外国人などの社会的マイノリティの避難行動**

選択したテーマ

- ✓ 日本で頻発している大雨災害での避難を想定して、高齢者や障がい者などが避難する際の問題を調べる。
- ✓ マイノリティの方の早期避難が実現するような解決策をいくつか挙げて、それらの解決策が与える影響についても考えた。

選択したテーマ

- ✓ この発表のテーマとSDGsの目標との関連性を考える。
- ✓ メンバー1人1人がワークを通して考えたことや学んだことを共有する。

具体的な課題

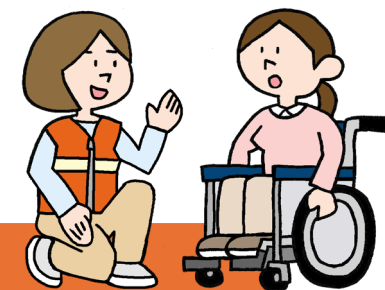
NHKの調査によると、東日本大震災における犠牲者数の6割以上が60歳以上の高齢者であり、障がい者の死亡率は住民全体の死亡率の2倍であった。

※前提として大雨災害時の避難行動を想定している。

- 避難所までのアクセスが悪い(距離がある、段差や傾斜がある)。
- 避難を支援してくれる人が周りにいない。
- そもそも避難に対して抵抗がある、または避難を諦めている。
- 言語や文化の問題。



社会的マイノリティを含んだ支援策が充実していない。
いわゆる「災害弱者」と呼ばれる人たちの避難行動・避難生活を
事前に考えておく必要がある。

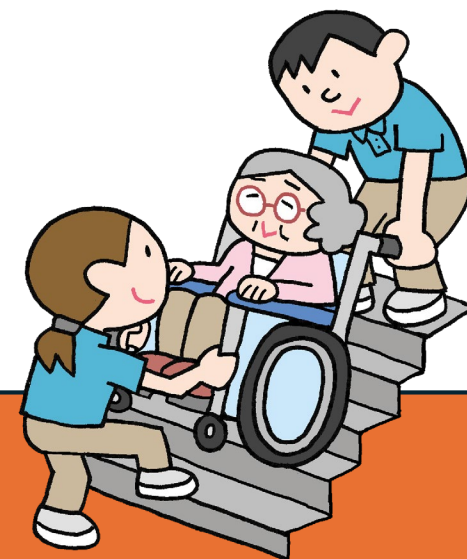


課題の解決方法

- 避難所までのアクセスが悪い(距離、障害物が多い、段差や傾斜がある)
- 避難支援をしてくれる人がいない
- そもそも避難に対して抵抗がある
- 言語の問題



早期避難



イラスト提供：いじちひろゆきさん

課題の解決方法

1.早期避難の内容

防災コミュニティ(消防団)
結団



有事の際に早期避難を実行
するように要請する



イラスト提供: いじちひろゆきさん

Give → ジムの会員費やプロテインの無料特典を与える

Take → 半年に1回行う避難訓練や防災の勉強会への参加
地方自治体との要介護者の状況確認

課題の解決方法

イラスト提供：いじちひろゆきさん

1. 早期避難の内容(システム)

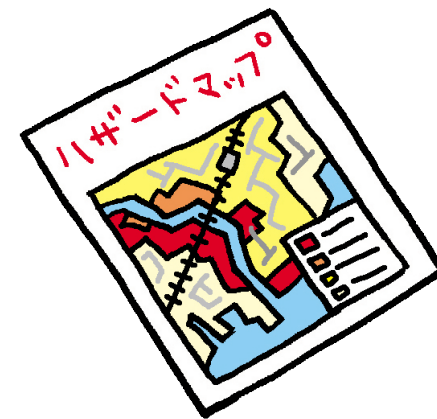
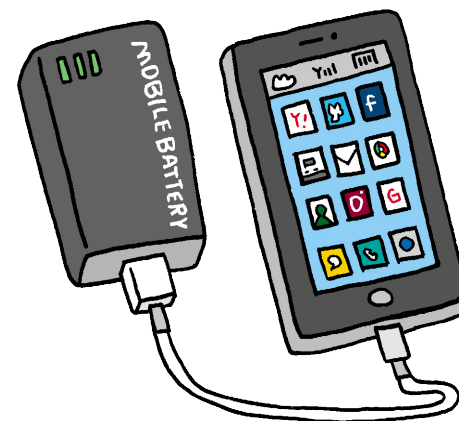
対象者 防災コミュニティ(消防団)加入者

媒体 IOS,Android対応のアプリケーション

内容

- ・要介護者の家が分かるマップ
- ・早期避難の通知
- ・誰が誰を助けに行くか分かる
- ・助けたらチェックマークが表示

無駄足が無くなり
スムーズな避難に繋がる



課題の解決方法

2.早期避難の内容

地域の人の状況把握が普段からできている状態にする



地域コミュニティをより強固する



イラスト提供：いじちひろゆきさん

～方法～

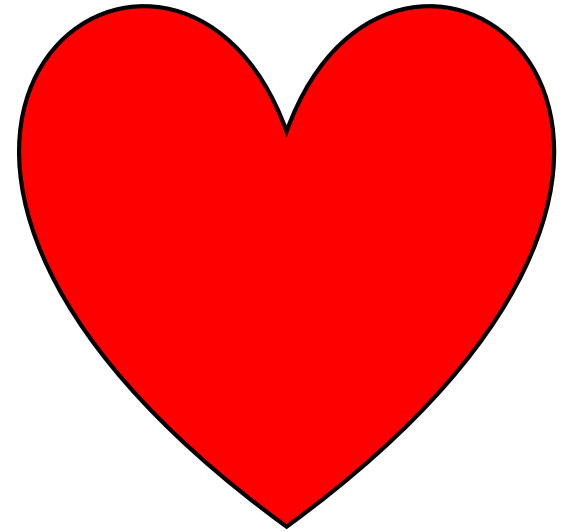
地域のお祭りや公園清掃などの町内会イベントを定期的に行いコミュニティを強固にする。

解決方法がもたらす影響

メリット

- ・心のよりどころができる
- ・緊急時でも冷静に対応できる

例) 昨日見学した東峰村
定期的な避難訓練を実施
→2017年九州北部豪雨では、死者3名と
人的被害が抑えられた



解決方法がもたらす影響

デメリット

- ・ 支援する人も一緒に巻き込まれる可能性がある

例) 東日本大震災では自宅にいた学生が
祖父母の避難を手伝おうとしたり、
家族の帰りを待っていたりしたため死亡した。



デメリットを軽減できる

早期避難が多くの命を救う



イラスト提供: いじちひろゆきさん

SDGsとテーマの関連

11 住み続けられる
まちづくりを



「住み続けられるまちづくりを」

災害による被害や損失を減らす

背景

- 世界各地で地震や津波などの自然災害の発生が深刻。
- 自然災害で亡くなる人の多くは防災対策への投資や災害対策を行う機関が少ない低所得国に集中。

SDGsとテーマの関連



日本では・・

- 自然災害の発生が他国と比較して多い。
- 命や財産を危険にさらされる人が多い。



- 災害に対するレジリエンス(対応力)の向上や、これまでの災害対策の弱点を改善していく努力が必要
- そして、誰もが住み続けられるまちづくりを実現！！

学んだこと・発見したこと

災害は他人事ではないと改めて実感した。



普段の日常生活で高齢者や障害者の目線になって物事を考える機会は少なかったが、ワークを通して知らないことを調べていくうちに考え方の視点が広がって貴重な経験となった。



SDGsと防災は密接にかかわっていることがわかった。
SDG11の「住み続けられる街づくりを」の他にも、SDG13の「気候変動に具体的な対策を」なども密着していると分かった。



今の生活ができていることがどれだけ幸せなのかを
思い知った。ボランティア活動にも参加したいと思った。



参考文献

- 国土交通省、審議会「自然災害リスクの増大について」
<https://www.mlit.go.jp/policy/shingikai/content/001328939.pdf>
- NHK(2023.04)「災害時の高齢者・障害者の避難「2倍の死亡率」を繰り返さないためには？ NHK ハートネット」(<https://www.nhk.or.jp/heart-net/article/10/> 2024年03月06日参照)
- いじちひろゆき「防災イラスト」(<https://ijichihiroyuki.net/bousai/> 2024年03月06日参照)
- 藤本一雄, 戸塚唯氏：東日本大震災被災者の後悔に関する証言に対するドキュメント分析から考える防災活動の目的, 地域安全学会論文集, Vol.27, pp.1-11,2015. (DOI : <https://doi.org/10.11314/jisss.27.1> 2024年03月06日参照)
- NHK(2024.02)「東日本大震災で亡くなった高校生について報告会 4割が自宅で」(<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240217/k10014362141000.html> 2024年03月06日参照)
- 加藤 真由『「津波てんでんこ」を正しく理解しよう～災害に強い組織づくりへの第一歩～』MS&ADインターリスク総研株式会社(<https://x.gd/wVpJa> 2024年03月06日参照)
- MIRAI PORT「SDGs11「住み続けられるまちづくりを」とは？世界と日本の取り組み」(<https://www.mirai-port.com/prosperity/2045/> 2024年03月06日参照)

研究タイトル

災害が起こる前にできること

情報システム工学科 1年	村上
電気工学科 1年	三橋
社会環境学科 3年	長友
情報通信工学科 4年	瀬利

目次

- グループテーマ・選択した課題
- 課題解決方法①
- 課題解決方法②
- SDGsとの関連
- グループワークを通して学んだこと

グループテーマ・選択した課題

1.防災意識向上

2.防災に対する前提条件を変える

課題解決方法①（防災意識向上）

<日本における自然災害>

日本の地理的要因による自然災害の頻発

日本にいる限り災害は避けては通れない



予め地域の災害リスクについて把握しておき，災害時に適切な行動を取れるようにしておく必要がある。

有効策）ハザードマップの理解，避難訓練

課題解決方法①（防災意識向上）

＜ハザードマップの現状＞

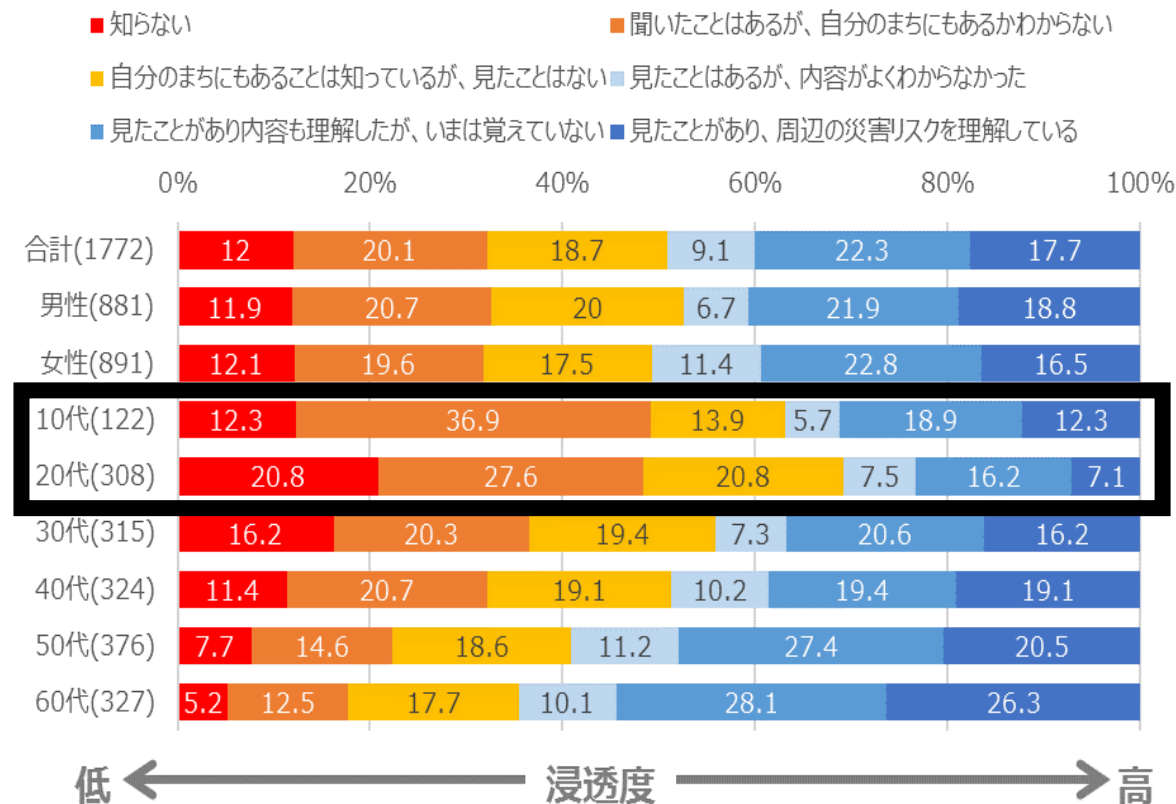
「見たことがあり、周辺の災害リスクを理解している」のは
17.7%

「知らない」や「見たことがない」が半数強の50.8%



特に若い人ほど 浸透率が低い。

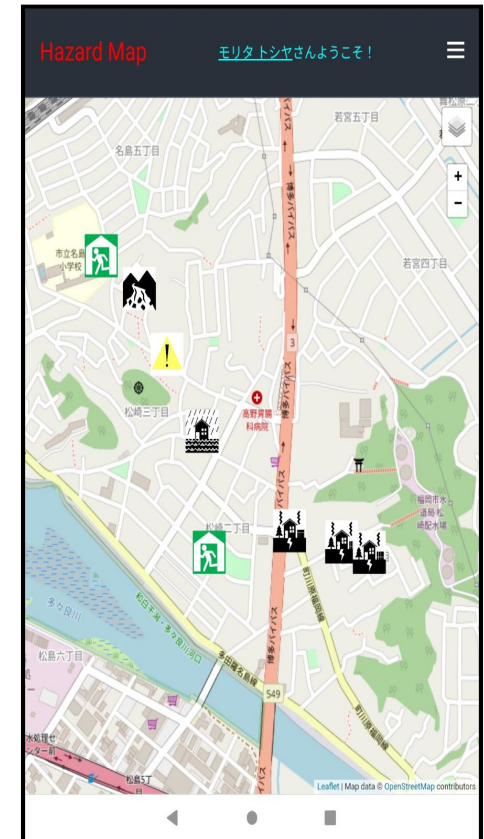
ハザードマップの閲覧経験・理解（性・年代別）



課題解決方法①（防災意識向上）

＜ハザードマップの浸透率を上げる取り組み＞

2023年度 福岡工業大学 石田研究室 森田 「マイハザードマップシステム」



[参考文献]福岡工業大学 石田研究室 ” <https://glocalvision.net/ishilab/research>”

課題解決方法① (防災意識向上)

<ハザードマップの浸透率を上げる取り組み>

2023年度 福岡工業大学 石田研究室 福島 「バーチャルハザードマップ」



課題解決方法① (防災意識向上)

<避難訓練の参加率を上げる取り組み>

ケース1) 福岡県東峰村

→日曜日の午前中に短時間で実施

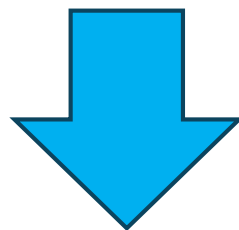
ケース2) 兵庫県加古川市

→夏祭りや餅つき大会といった子供からお年寄りまでのしめる年間行事に合わせて、防災訓練の実施

課題解決方法②（防災に対する前提条件を変える）

<日本における災害意識>

被災する原因は人か環境か？



災害に対する意識づくりをした後にそれに基づいて環境づくりをする必要があるのではないかと考える

防災に対する思い込みと環境づくりを考え直す！

課題解決方法②（防災に対する前提条件をかえる）

< 防災に対する思い込み > パターナリズム

- ①防災にはゴールがある.
- ②自分は被災しないと思い込んでいる.
- ③災害がいつどこで起こるか分からない.
- ④被災したら支援しなければならない.
- ⑤防災は必要である.
- ⑥家を建てる際に家が流されたことを考慮していない.

※被災する当時者にとってはどうか？

課題解決方法②（防災に対する前提条件をかえる）

＜解決方法＞ 当事者に近い経験をし，実感を持つ

- ①動物が災害を察知する動画や論文.
- ②過去に災害復旧した土地に看板を立てる.
- ③シュミレーションや観光を通して体験する.

動物の機器察知能力を活用した災害予測

< 災害時の動物の異常行動 >

例) イルカやクジラの集団座礁
猫が外へ出ようとする
ネズミが町からいなくなる
カラスが大群で空を飛ぶ



動物の異常行動の例と災害の発生に相関関係ある。
保護猫や野生動物の保護活動にも貢献できる

課題解決方法②（防災に対する前提条件を変える）

<災害ゴミを減らす>

- ・家を建てる際，どのような災害がくるかを考慮したうえで家を建てる（耐震強化）
- ・空き家を減らすか使わなくなった家を事前に壊す.

※災害ゴミを減らすために，建材を工夫する.

課題解決方法②（防災に対する前提条件をなくす）

<メリット>

- ①判断材料が増える.
- ②関心を惹きやすくする.
- ③実感しやすくなる
- ④考える人が増えることで新しい解決方法が増える.

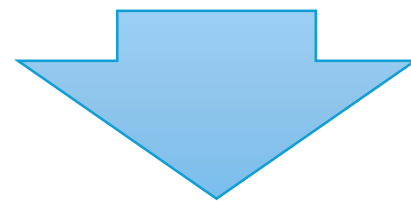
<デメリット>

- ①個々の立場や価値判断を考慮しなければ対立を生む.
- ②不確実な要素が多くデータは少ない.

SDGsとの関連



- ・ハザードマップの浸透率を上げる
幼少期からハザードマップを簡単に利用することで防災を身近に感じることができる

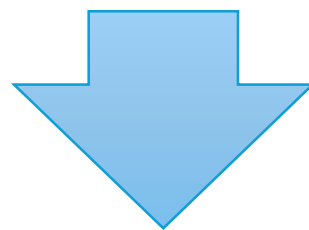


4：質の高い教育をみんなに

SDGsとの関連



避難訓練の参加率を上げる
→実際に避難する際に協力する際だけでなく、地域住民とのコミュニティを
作り上げることができる。



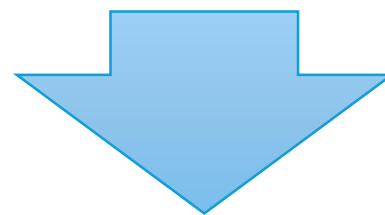
11：住み続けられる街づくりを

SDGsとの関連

12 つくる責任
つかう責任



- ・ 情報を活用した環境づくり
→ 使用者と製造者のコミュニケーション
情報共有を改善して、不一致をなくす
環境に配慮した家づくりを行う
当事者意識を持つ

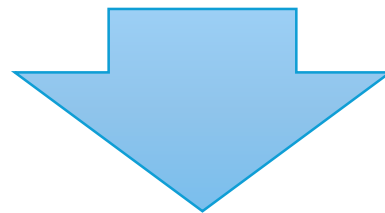


12：つくる責任つかう責任

SDGsとの関連



・動物の危機察知能力を活用した災害予測
→多数の動物のデータを収集して災害予測に使用するため、災害予測で無く生態系の保護にも収集したデータを利用することができる。



15：陸の豊かさを守ろう

グループワークを通して感じたこと

フィールドワークが大事（社会環境 長友）

ICTで解決できる問題があるか（情報通信 瀬利）

災害にどのような情報が必要なのかを知っていき
たい（情報システム 村上）

どのような技術が求められているのかを知るよう
にしたい（電気 三橋）

私たちが災害の前後で取るべき行動と 国・地域で活用できる対策方法

情報システム工学科	1年	梅北 悠翔
知能機械工学科	1年	大塚 佳知
電気工学科	3年	田代 理一郎

目次

1. 選択した課題
2. 各課題の解決方法とSDGsへの貢献
3. グループワークを通して学んだこと

1.選択した課題

1.選択した課題

- 防災教育
- 災害後の動き
- エネルギー供給問題

2.各課題の解決方法とSDG s への貢献

2-1. 防災教育

(目標4:質の高い教育をみんなに)



課題

今の防災教育は適切なのか？

北海道教育大学の調査

実際に被災経験のある大学生に聞くと、
地域で起こりやすい災害・危険な場所などについて
不十分だと考えている学生やこれから学びたいという
学生が多かった

防災教育で教えるべきこと、 身に付けること

1.必要な最低限のものをまとめておく

2.非常時に備えた食料の備蓄

3.ハザードマップの最新のものを確認する

4.避難訓練の自主参加

解決策

- 先生の知識不足
→セミナーやガイドブックを作る
- 大学生の防災教育
→防災対策のパンフレットを電子情報で送り、
どんな対策、防災に対しての備え、意識を問うアンケート
- 地域での防災訓練の実施
→パンフレットを配れば多くの人の目に留まるのではないか

2-2.災害後の動き



目標 1 1：住み続けられるまちづくりを

- ・ 正確な情報の獲得・発信
- ・ 身の安全の確保
- ・ 地域周辺の人々とのコミュニケーション

正確な情報の獲得・発信

→スマホなどの電子端末を用いて、ニュースやSNSで最新の情報を得る。

→地域の人々とコミュニケーションを取ることによって災害についての情報を得る。

→SNSで現在の災害情報などをSNSを通じて情報を発信する。



身の安全の確保

01

→災害発生時、頭を守ったり机の下に隠れる。

02

→事前に調べていたハザードマップを参考にして指定の位置に避難する。

03

→最新かつ正確な情報を元に避難する。

地域周辺の人々とのコミュニケーション

→地域での避難訓練
や行事に積極的に参
加しておく。

→近所の人たちとは
挨拶をこまめにする。

→災害発生時には地
域の人々にも声をかけ、一緒に避難する。

→事前に健康に問題が
ある人をマークしてお
き、その人の連絡先を
全体に共有しておく。

2-3.エネルギー供給問題

2-3.エネルギー供給問題

- 課題設定の背景

電線の断線によって、電力供給機能が一時的に停止

→電化製品全般の使用や充電が困難な状況

→避難先での生活が苦しく、辛いものに

少しでも被害を軽減する方法はないか

2-3.エネルギー供給問題

- エネルギー供給問題の解決策

- ①ワイヤレス給電技術の活用

- ②各自治体で複数台の非常用電源やコードの常備および供給

2-3.エネルギー供給問題

- ワイヤレス給電技術とは
→電線（ワイヤ）を使わずに電力を送る技術
電源からの電力を送信アンテナから受信アンテナへ送り，使用

例) スマホのワイヤレス充電器



2-3.エネルギー供給問題

災害時の実用性が期待されるワイヤレス給電の種類

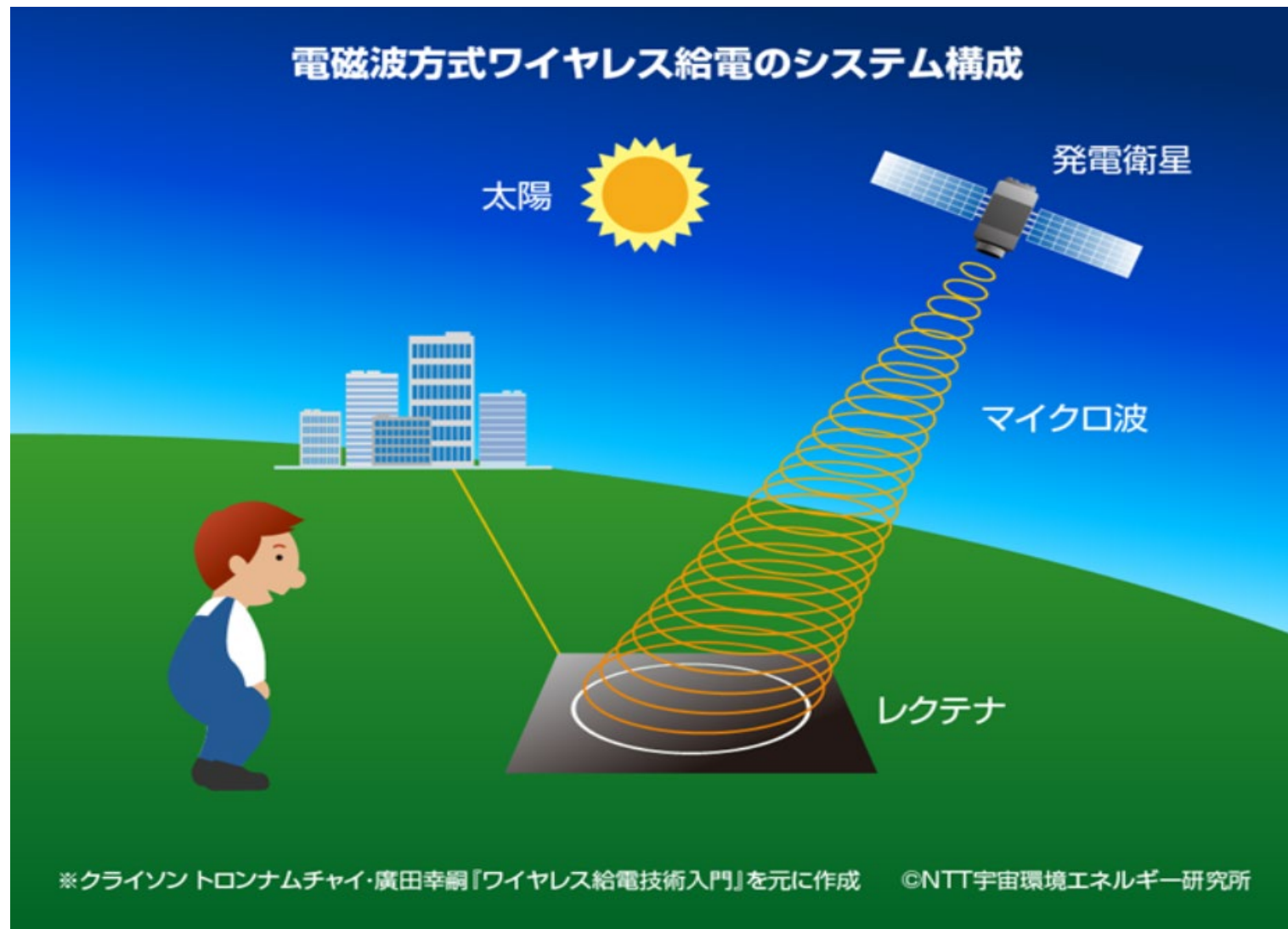
- 電磁波方式(マイクロ波/レーザー)のワイヤレス給電

→ 静止衛星に太陽光発電装置を設置し発電

そこで得た電力を衛星のアンテナから地上のアンテナへ電磁波として放出・受信の後にバッテリーへの蓄電および供給

化石燃料に頼らないクリーンで無尽蔵なエネルギー

2-3.エネルギー供給問題



2-3.エネルギー供給問題

SDGsの17の目標のうち

目標7：エネルギーをみんなにそしてクリーンに

目標9：産業と技術革新の基盤を作ろう

目標11：住み続けられるまちづくりを

の3つの目標に貢献できるのではないか

2-3.エネルギー供給問題

しかし・・・

電磁波方式のワイヤレス給電は研究・開発段階で実用化には至っていない

なぜなら・・・

宇宙側と地球側共に大規模なシステムが必要

雲や雨，大気の影響を受けやすい

人(特に眼)へのダメージを避けるための安全配慮が必要 など、、、

2-3.エネルギー供給問題

そこで・・・

簡易的な対策方法として、各自治体ごとに複数の非常用電源とコードの常備が有効なのではないかと考えられる

2-3.エネルギー供給問題

メリット

- 災害による突然の停電時にもすぐに対応できる
- 持ち運びしやすい

デメリット

- 1つ1つの価格が高い(容量が大きい程、価格が高い傾向)
- 多数の電源を置いておける保管場所の確保が必要
→各自治体ごとの予算や施設などとの兼ね合い、決定

2-3.エネルギー供給問題

SDGsの17の目標のうち

目標7：エネルギーをみんなにそしてクリーンに

目標10：人や国の不平等をなくそう

の2つの目標に貢献できるのではないか

3. グループワークを通して学んだこと

3. グループワークを通して学んだこと

- 災害に対するより強い危機感
- 災害時に役立つ近未来的技術の認知

3. グループワークを通して学んだこと

今後は・・・

素早く正確な情報を発信できるようなシステムの構築技術や、災害直後に活躍できるようなロボット・機械の設計などについて学んでいきたい

参考文献

- ワイヤレス給電とは？活用メリットや原理、種類、効率について解説 | 地球の未来を宇宙から考えるメディア Beyond Our Planet (rd.ntt)
- 地震災害を経験した大学生による減災教育の評価：SDGsの達成に向けたクロスカリキュラムによる減災教育

著者：能條 歩，岩崎 裕

ご清聴ありがとうございました

防災教育

E 班

知能機械

工学科

4 年

辻田 敬梧

電気工学科

3 年

田町 太暉

社会環境学科

2 年

角南 優輔

情報システム

工学科

1 年

谷内 拓輝

メンバー 紹介

知能機械

工学科

4 年

辻田 敬梧

電気工学科

3 年

田町 太暉

社会環境学科

2 年

角南 優輔

情報システム

工学科

1 年

谷内 拓輝

大きな課題

義務教育段階での
防災教育における生徒と先生の認識の相違



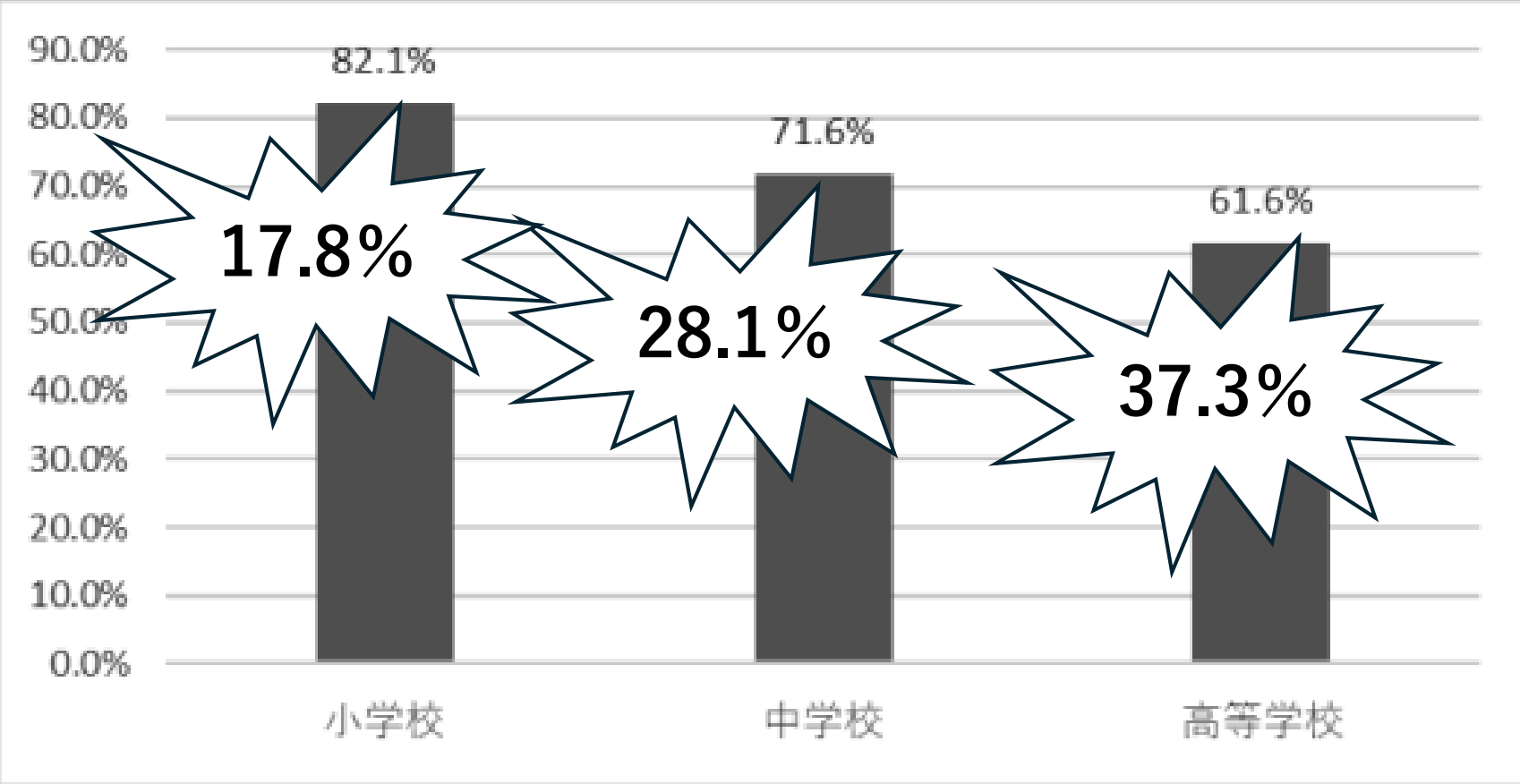
平成30年の防災教育の実施率（文部科学省調べ）

	調査対象	指導している学校	教科	総合的な学習の時間	学校行事	児童会・生徒会活動・クラブ活動	学級活動 ホームルーム活動	その他
合計	35,793	35,690 (99.7%)	18,865 (52.7%)	11,505 (32.1%)	28,987 (80.9%)	4,567 (12.7%)	26,216 (73.2%)	2,241 (6.2%)
小学校	19,411	19,394 99.9%	10,775 55.5%	6,231 32.1%	16,912 87.1%	1,967 10.1%	14,916 76.8%	1,108 5.7%
中学校	10,072	10,042 99.7%	5,659 56.2%	3,904 38.8%	7,198 71.5%	1,724 17.1%	7,246 71.9%	667 6.6%
義務教育学校	87	87 100.0%	56 64.4%	38 43.7%	69 79.3%	25 28.7%	64 73.6%	8 9.2%
高等学校	5,040	4,987 98.9%	1,959 38.9%	1,051 20.9%	3,909 77.6%	713 14.1%	3,217 63.8%	306 6.1%
中等教育学校	54	53 98.1%	21 38.9%	18 33.3%	41 75.9%	13 24.1%	40 74.1%	3 5.6%
特別支援学校	1,129	1,127 99.8%	395 35.0%	263 23.3%	858 76.0%	125 11.1%	733 64.9%	149 13.2%

出典：学校安全の推進に関する計画に係る取り組み状況調査（平成30年度実績）
※合計数は、表に記載のある学校を安全教育推進室において再集計した数値

あなたの学校は火災避難訓練以外で防災教育に取り組んでいますかに対する結果

	調査対象	指導している学校
合計	35,793	35,690 (99.7%)
小学校	19,411	19,394 99.9%
中学校	10,072	10,042 99.7%
義務教育学校	87	87 100.0%
高等学校	5,040	4,987 98.9%
中等教育学校	54	53 98.1%
特別支援学校	1,129	1,127 99.8%



課題から見えてきた物

①義務教育段階での明確な
防災教育の強化が必要

②親等の周辺の人の影響を受けやすい年齢
その周囲の方々に対しても防災意識を
持ってもらう事が必要

解決方法

- 生徒の発達段階に応じた防災教育を保護者参加型で行う
- 学校地域本部を設置すること



生徒の発達段階に応じた防災教育を 保護者参加型で行う

- 保護者同伴なので理解を得られやすい
- 当事者意識を持ってもらえる
- 発達段階に応じた配慮が必要

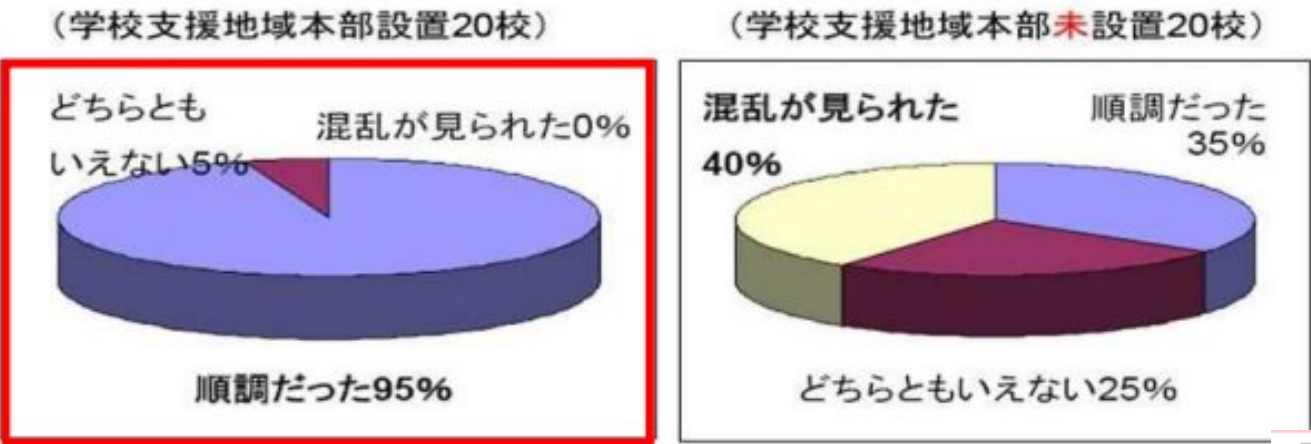


学校地域本部を設置すること

- 学校地域本部→学校、家庭および地域住民が一体となって地域ぐるみで子どもを育てる体制を整える事を目標とした組織
(文部科学省HPより)
- 地域も含めた防災意識に繋がる
- 自治組織の立ち上げがスムーズ、生徒の行動面、心理的影響が見られた

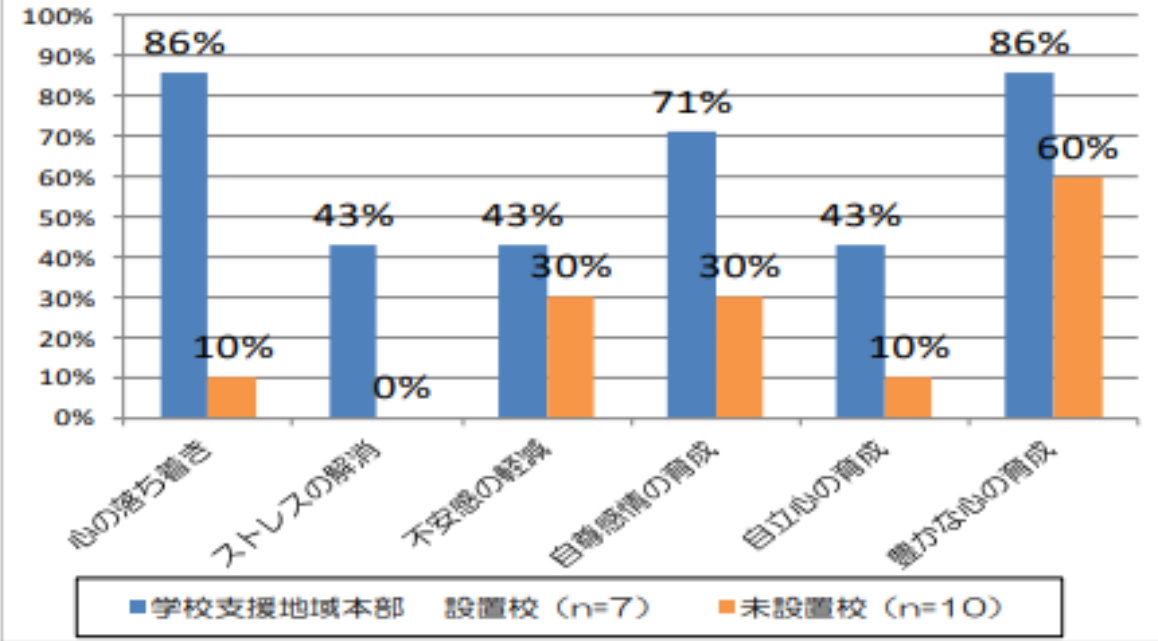


東日本大震災における宮城県内の小中学校の校長へのアンケート



(東日本大震災後の宮城県内の小中学校校長40名へのアンケート調査：文部科学省調べ)

熊本地震における益城町周辺の小中学校へのアンケート



文部科学省HPより→

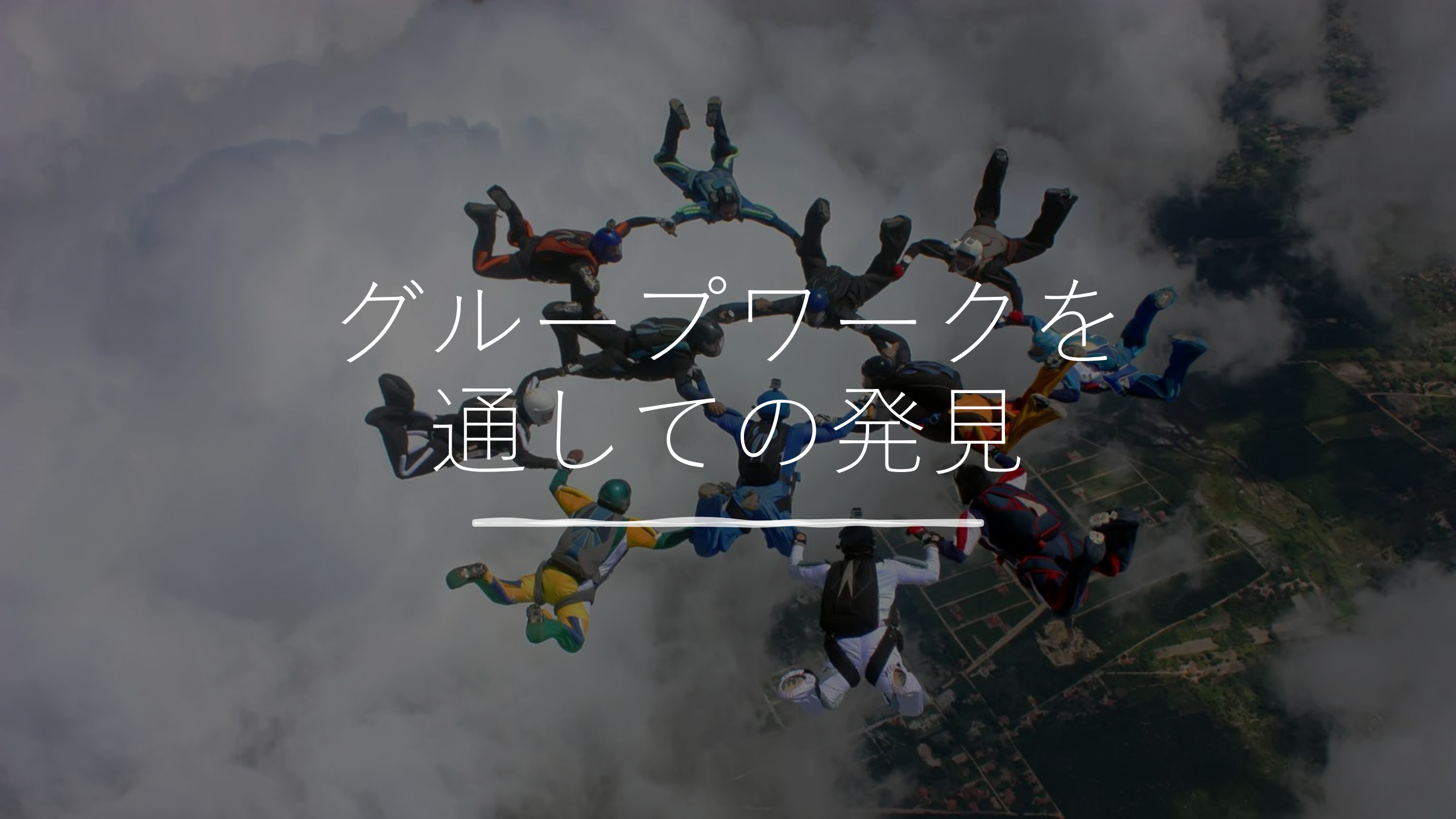
SDGs 17の目標との関連



- 4→防災教育の質を上げる点から
 - 11→住み続けられる町作り
 - 13→気候変動に対しての対策
- 17→パートナーシップで目標達成

まとめ

- 発達段階に応じた、印象に残る体験をすることで防災教育がなされているという意識を持ってもらう
- 保護者や地域も参加して防災することで被災時に生徒の落ち着いた行動に繋がる



グループワークを 通しての発見

参考文献

- 文部科学省、文部科学省における教育の現状について
<https://www.mext.go.jp/kaigisiryō/content/000121137.pdf>
- 防災教育学研究 わが国の学校における防災教育の現状と課題
https://www.jstage.jst.go.jp/article/rjde/1/1/1_19/_pdf/-char/ja
- 文部科学省、文部科学省における防災教育の現状について
<https://www.mext.go.jp/kaigisiryō/content/000121137.pdf>
- 文部科学省、学校支援地域本部に関すること
https://www.mext.go.jp/a_menu/01_l/08052911/004.htm

ご静聴ありがとうございました。
